

「真実の宗教」 (十七)

——私にとって報恩とは——

櫟 暁 講 述

〈資料一〉

浄土真宗（浄土真宗の意味）

〈浄土真宗〉という語は宗名でなく、真宗聖典では、次のような本質的な意味で用いられている。

（一）真実の教え。阿弥陀仏の本願を説く『無量寿経』の教えのこと。（標列・教巻 化巻）

●標列（一五〇―L十一）

大無量寿経 真実の教 ★浄土真宗

●教巻（一五二―L三）

謹んで★浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

●化巻〈本〉（三四五―L十五）

四依弘経の大士、三朝浄土の宗師、★真宗念仏を開きて濁世の邪偽を導く。三経の大綱、顕彰隠密の義ありといえども、信心を彰して能入とす。（以上真実教）

◆私解 真実教は方便教（主として聖道門及び〈その他の哲学思想〉を含む）に対し、また一般世俗の邪義（名利愛欲追及 現世祈祷）に対す。

(二) 選択本願すなわち第十八願 (末灯鈔・高僧和讃)

● 末灯鈔 (六〇一—L九)

浄土宗のなかに真あり仮(ケ)あり、真というは選択本願なり、仮というは定散二善なり、
選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。★浄土真宗は大乗のなかの至極なり。

● 高僧和讃 (四九八—B二)

智慧光のちからより 本師源空あらわれて ★浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたま
う (以上 浄土真宗の根源)

◆ 私解 選択本願は諸仏 諸菩薩の本願に対す。

(三) 念仏往生 (一念多念文意)

● 一念多念文意 (五四五—L十六)

浄土真宗のならひには念仏往生ともうすなり

(浄土真宗の伝承)

◆ 私解 念仏往生は諸行往生 (『観経』顕説) に対す。

(四) 信心往生の教え (唯信鈔文意)

● 唯信鈔文意 (五五二—L七)

眞実信心をうれば実報土にうまるとおしへたまへるを浄土眞宗の正意とすとしるべしとなり。
(浄土眞宗の本質)

◆私解 信心往生は単なる死後往生思想に対す。

(五)他力 (血脈文集)

●親鸞聖人血脈文集 (五九四—L三)

それ、★浄土眞宗のころは、往生の根機に他力あり、自力あり。(中略) (L六) 他力と申すことは、弥陀如来の御ちかいの中に、選択摂取したまえる第十八の念仏往生の本願を信樂するを、他力とは申すなり。如来の御ちかいなれば、「他力には義なきを義とす」と、聖人のおおせごとにてありき。
(他力の救済)

◆私解 他力は自力分別によつて人生の根本問題を解決しようとする努力に対す。

(六)浄土成仏 (歎異抄)

●歎異抄 (六三七—L一)

「★浄土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならいそうろうぞ」とこそ、故聖人のおおせにはそうらいしか。
(他力の救済の因果)

◆私解 浄土成仏は人間の分別世界において悟りを開こうとする思想、言葉に対す。

これらは、浄土門の真実の教え、浄土真宗の救済の原理、浄土真宗の根源、浄土真宗の伝承、浄土真宗の本質、他力の救済の因果を示しているのもあって、宗祖親鸞においては〈浄土真宗〉（真宗または浄土宗）とは特定の宗派名ではなくて、阿弥陀仏の浄土に往生・成仏する道そのもの、その教えの本質的意味をあらわしている。そして宗祖親鸞は師の元祖法然に絶対随順していたから、宗祖親鸞の云う〈浄土真宗〉とは、元祖法然によって明らかにされた浄土往生・成仏を説く真実の教えなのである。

〈資料二〉

東京新聞 社会面 二〇〇九年十月二十三日（金）

★森光子さんら招き秋の園遊会

天皇、皇后両陛下が主催された秋の園遊会が二十二日、東京・元赤坂の赤坂御苑で開かれた。国民栄誉賞を受賞した女優の森光子さん（八九）や「おくりびと」でアカデミー賞外国語映画賞を獲得した映画監督の滝田洋二郎さん（五三）ら各界の功労者、自治体の首長ら約千七百人が出席した。

天皇陛下から「もうじき九十におなりに」と語り掛けられた森さん。十三歳のとき、故郷の京都で陛下の誕生をサイレンで知ったと話し「鳴った 鳴った サイレン 皇太子さま お生まれなった」とメロディ付きで当時の奉祝歌を紹介した。舞台「放浪記」は再来年で上演五十年。「一生懸命体を元気に保つよう努力してまいります」と決意を伝えた。

宇宙飛行士の若田光一さん（四六）は、皇后さまがかつて詠んだ歌で宇宙を「真闇（まやみ）」と表現されたことに触れ、陛下に「真闇の宇宙には夢と希望が詰まっている感じがしました」と語っていた。

〈法 話〉

昨年も報恩講にお招きいただき、法話をさせていただきました鹿児島教区の法泉寺前住職の機でございます。ご縁がありまして二十年ぐらいこの報恩講に法話をさせていただいておりますが、毎年毎年、今年が最後だろうと思ってお話申し上げているのですが、また命をいただけて今年も報恩講にあわせていただくことができました。

それで、真宗教団は報恩講教団だといわれています。と申しますのは、報恩講を中心にして形成されておる教団でありまして、その始まりが二つあるわけです。一つは、関東の教団で二十八日の念仏という集いがずっと勤まっていたわけです。それは、親鸞聖人が常陸の国においてになる時に、法然上人のご命日に二十五日の念仏として勤めていたわけですが、親鸞聖人が京都で亡くなられた事を聞いて、門弟が二十五日の念仏を二十八日の念仏として受け継いでいかれたというところが、関東における報恩講の始まりでございます。もう一つは、京都におきまして、親鸞聖人が亡くなられた後に親鸞聖人の御廟が出来上がります。それは、一番末娘の覚信尼公が、御自分の相続された土地を全部親鸞聖人の御廟の用地として提出されまして、そこで小さな御廟が出来上がるわけです。その御廟で毎年十一月二十八日に門弟の人たちと一緒に聖人の言葉を味わい合って、自分が念仏者に成らして頂いたことは親鸞聖人のお蔭であります、と深く御恩を謝する

集いが勤まってきた。もちろん関東の方が先であります。二十五日の念仏が二十八日の念仏になったのですから。しかし、真宗教団はどちらが先だということではなくて、全体をあげて報恩講を中心とする教団であることは間違いないことです。報恩講のお勤めの最後に、「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし」という御和讃があります。それがまた独立して恩徳讃として楽譜がついていつも皆さん一緒に歌っておられることでもあります。それで、私はあの和讃は言葉はみな詠みあげておりますが、内容はどういうことかということがもう一つ納得できなかったのも、曾我先生にお聞きしたことがあります。それは『身を粉にしても ほねをくだきても』はもちろん喩えであります、これは機の深信を徹底せよということだと、曾我先生は教えてくださいました。身を粉にする、ほねをくだくというのは、もちろんそれは喩えでありますけれども、それは我々が信心の内が一番大事な基礎になっております、機の深信をより深く徹底させて頂かなくてはならないということが、これがまた御恩報謝なのだ。信心を深く深く徹底させていただいて、自分の人生の大目標に気が付かせていただく。往生成仏という大目標に気が付かせていただく。それをより深く生きている間ずっと貫いていく、ということが如来大悲の御恩を報ずることであり、如来の御恩を我々に教えていただいた師匠先輩方々の御恩を報ずることだと、私は先生から聴かせていただきまして、なるほどと納得させていただいたわけでございます。それを今さきほど思い出し出ておりました。

今日お話しする資料を皆様方にご覧頂いているわけですが、これは今回作っていただきました、この本の最初に出ておるものと同じでございます。この『真実の宗教 十六号』は、淡海さんと副住職様のご努力によつて、私の昨年の法話が文章になつてゐるわけでありませう。それで、私も最初の原稿は話した言葉の音がそのまま文字になつたわけですから、文章として読んでいただくには不適當だということもあり、また誤字脱字等があつた場合はそれを補つていくという作業をさせていただきまして、この本が出来上がったわけでもあります。

その最初の頁を見ていただきまして、〈資料一〉と書いてございます。浄土真宗の意味ということで、

「浄土真宗」という語は宗名でなく、『真宗聖典』では、次のような本質的な意味で用いられている。」

これはどういふことかと申しますと、今日は、浄土宗、浄土真宗、天台宗、真言宗とかいふ日本仏教の宗派の名前として浄土真宗が使われている。これが一般的です。ところが、親鸞聖人が浄土真宗とおっしゃつたのは、これは浄土の真宗、法然上人の開かれた浄土宗の真の宗むねという一番大事なところ。それを別な言葉で申しますと、親鸞聖人のお手紙の『御消息集』広本の第五通

に「浄土宗のまことのそこ」という言葉がございます。聖典をお持ちの方は見てください。これはやさしい言葉で言えばそういうことになります。「浄土宗のまことのそこ」と浄土真宗という言葉をやさしく述べておられる、これは五六六頁四行目。

「なにごとよりは、聖教のおしえをもしらず、また、浄土宗のまことのそこをもしらずして、」

という言葉で始まっております。「まことのそこ」というのは一つの喩えでありまして、例えば、コップにお砂糖を入れて水で溶かしてしばらく置いておきますと砂糖が下に溜まっております。上の方は少し甘いのですが、本当の甘いところは下に溜まってしまっておる。それで、うわ水だけ飲んでこれが砂糖水だと思っている場合もあるけれども、本当の甘味は下に残っておる。というのを一つ喩えにして考えましたら、「まことのそこ」ということはそういうことでございます。一番大事なところ。法然上人は親鸞聖人の先生でいらっしゃいます。これは申すまでもないので、親鸞聖人と違ったところはどこかと申しますと、生涯聖道門の僧侶の形をずっと保ってこられた方です。ですから、肉食もなさらず、妻帯もなさらず、日課七万遍というお念仏を称えておられた。流罪の時に警護の武士に守られて四国に向われるときに、お念仏をしておられた。警護の武士が、「お前は念仏を止めろ」という法令の違反者として流しものにされていくのに、そ

の途上で念仏を称えるとは何事か」と叱ったそうです。そうしたら法然上人は、「私は殺されても念仏を止めるわけにはまいりません。」とお答えになったと、こういうことが伝わっています。

親鸞聖人は法然上人を唯一の師匠としておられたのですが、結婚もされたし、普通の食事もされた。ですから、法然上人は出家の姿をずっとおとりになっておられて、親鸞聖人は在家の生活をされていた。そこで法然上人の知られない体験、在家の悩みも体験しておられる。つまり、家庭を持つということは、家族の中で色々な問題が起きてくる。その悩みをどう乗り越えて生きられるかということでもあります。肉食ということは、他の生物を殺して食べている。罪深い生活をしているものがどうしたらその罪を乗り越えて浄土往生という精神生活をさせていただけるか、という二つの問題、これは法然上人が体験せられなかった問題。ということは、親鸞聖人の教えは、出家も在家も全ての人が本願を信じ念仏申す、この一言でたすかかっていくのだというのが、親鸞聖人の教えである。私がそれを言葉を変えて申しますと、浄土真宗は法然上人と親鸞聖人のお二人が共同して開いていただいた大乘仏教の究極の教えだと思えます。究極とは、一番大事であり、一番わかりにくい、しかし多くの人に広まっていく、そういう教え。平たく云えばそういう教えです。ただ僧侶だけがこつこつ修行と勉強をして悟りを開くというそういう教えではないのです。それで、お釈迦様が亡くなられてからしばらくしたら僧侶だけが一所懸命教義を研究して精密な教義を形造った時代があります。それを龍樹菩薩が、これは教義がたくさん分析されて

精密になっているけれども、本当に出家も在家も共にたすかかっていく大乘仏教ではないのだと。こういう仏教とは違う本当の意味のお釈迦様の教えは、出家も在家も男も女も頭のいいものも頭の良くないものも全てが救われる教えが、これが念仏のみ法だのということをやまず最初に明らかにしてくださった方が龍樹菩薩。龍樹という方は、ナーガルジュナという方ですが、中国の人が名前までも翻訳して、龍というのは想像上の動物、樹は、樹木の樹です。その龍樹菩薩が、初めて易行道という、しかも個人的な救いというところだけに留まってしまうような仏教とは違う、全ての人が共にたすかかっていく仏教が真の仏教だということを明らかにしてくださった。龍樹菩薩から、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、法然のこの七高僧の方々が、ずっと教えを引き継ぎ伝えられて、これが今日の浄土真宗として我々の上^ににただけるようになったわけです。そのことをはっきり示されているのが『正信偈』です。皆様方いつも『正信偈』のお勤めをなさるでしょう。「帰命無量寿如来 南無不可思議光」。あの『正信偈』の教えは、『大無量寿経』と七高僧の教えを褒め讃えておられる偈であります。『正信偈』は言葉が難しいですが、親鸞聖人が大変な努力をなされて一二〇句八四〇字の『正信偈』をおつくりになった。真宗の教えはあの『正信偈』に収まっていると同時に、『正信偈』からもう一つ開かれた『教行信証』の第三の『信巻』というのがある。他力の信心というのは、自分で作り上げた信心ではない。私は神様を信じます、私は仏様を信じます、というような自分の心で作り上げた信心ではありません。それは、阿弥陀如来の本願のま

ことが、私の上に響いていただいて私の迷いが翻った、それが信心であります、ということをお親鸞聖人がはっきりと教えてくださった。そこまでは法然上人は云われなかつたのです。法然上人は「生死の家には疑いをもって所止となし、涅槃の城には信をもって能入すと」(『尊号銘文』引用五二七―七四、五二八―七二) いう具合に、我々がさとりに至るには信心が大事なのだということまでは云っていただいた。しかし親鸞聖人のように第十八願の至心、信樂、欲生の三つの心の意義を深く教えては下さらなかつた。ところが、親鸞聖人は他力の信心は我々がつくつた信仰ではありません。如来様のまことが私の上に響いて、そして私が「なるほど」と納得させていただけいたということなのだ。これを私が優しい言葉で申しますと、信心というは「なるほど」。日本語には深い意味がある言葉がある。二つ私はあると思います。一つは「なるほど」、一つは「お蔭様」。これは外国語にはないそうです。サンキューとお蔭様とは違うことです。あなたがこうしていただいたことに私は感謝しますというのがサンキューです。お蔭様というのは、何かにつけて全てのことにつけて、多くの方のお力を頂いて、ここに目覚めて生かしていただいております。ありがたいことでございます、というのがお蔭様です。「なるほど」というのは、頭で理解したというのとは違うのです。「なるほど」、「そうですか、なるほど。」と頷かせてもらうのです。それが難しいのです。ことに戦後の新しい教育を受けた者にとっては知的理解、頭で理解するということが優先しているのです。これはもう幼稚園からずっとそういう教育を受けているわけ

すから、頭で考えてわからんようなことはつまらんことだと。こういうことを云わないにしても腹の底にそれがあるわけです。頭のいい人は分かりが早い、頭の悪い人は分かりが遅い。こういうようなことで、「賢愚」という賢いものと愚かなものとの区別ができるわけです。そういうことがだんだん酷くなってくる。浄土真宗では老少・善悪・男女・賢愚、賢い愚かなどいうことを持ち出す必要はないのです。

「老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし。」

『歎異抄』第一章ですね。これが大事です。「老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし。」ということは、なるほど私のようなものがたすかるのは阿弥陀如来の本願力でありました、南無阿弥陀仏のおかげでございました、と深く納得させていただく。これが信心です。『教行信証』は、至心、信樂、欲生、涅槃、というような難しい言葉で書いてありますが、私はそれをもっともくだいていうならば、「なるほど」で、「なるほど」には深い意味があります。それは、私たちが長生きしたい、何とか幸せに生きたいと毎日いろいろ苦労しているでしょう。その生活の場所というものは、これは「穢土」というもので、穢土というのは大江戸線の江戸ではありません。不純粹なこの世ということです。

この頃日本の政治の流れが変わったでしょう。この本の後ろにも副住職様が書いておられます。そこに「仏法を聴いても経済的に裕福になるとか、生活に困らなくなるということとは決してありません。しかしながらなぜ教えを聴くのか本書で私、櫛が南無阿弥陀仏とは簡単にいえば仏に帰命せよということです。この仏に帰命した人は全てたすかりますよと仏様は私にそう云っていますよ。音が聞こえているか聞こえていないかは問題ではない。聞こえるということは耳で聞こえるということとは違います。腹に響いてくるということです。」と、私は申し上げたようです。それを私は忘れてしまっていました。私はこのごろ記憶力の減退が甚だしいのです。「転がせ転がせビール樽」ということがあります。山からビール樽を転がすと段々段々下に行くほど速くなる。私が教えていただいたある先生がそういうことを云われた。「あんた等若いから分らないだろうが、大体人生は山の上からビール樽を転がすようなものだよ」と云われた。その先生は五十いくつ。転がせ転がせビール樽というのはビール樽の速度は段々速くなってくる。最後は海にポチャッと落ちる。そういう話をされた先生がいらっしやった。それを思い出して私の記憶力が、そのビール樽が海に近くなって段々速くなって下に落ちていくようなもので、それほど記憶力が劣ってきたのです。それで自分は副住職様が書いてくださったことをいつ話したのだろうと思います。まあそういうことを話したことがあるらしいです。そこで今日の本題に入ってます。

資料一の第二番目まで去年お話ししました。(三)念仏往生ですが、浄土真宗は何かということをはつきりいつておられる言葉の一つは、

浄土真宗のならひには念仏往生ともうすなり (浄土真宗の伝承)

伝承といえますのは、先ほどから云いますように、釈尊からずっと教えが聞法者によって受け継ぎ伝えられてきたその最初は韋提希夫人ですね。浄土の教えを伝え、韋提希夫人が最初のこの人間世界の願生者です。自分の息子に牢獄に入れられ苦しみ悩み、どうして自分はこんな悪い子を産んだのでしょうか、と愚痴をこぼさなければならなかった韋提希夫人が釈尊の教えによって浄土に生まれるという精神生活というものを教えていただいた。これが浄土教が我々穢土はたらに用きをあらわしてくださった最初なのです。

「浄邦縁熟して、調達、闍世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまえり。」(『教行信証』 総序一四九―L三)

と、こういう難しい言葉で『教行信証』総序に書いてあります。易しく云ったら、「自分の子

の為に苦勞している。そういう韋提希は権力者の奥さんであつたけれども、これは本当に尊い目覚めが得られている人ではない。普通の人間。その普通の人間が息子に背かれて牢獄に入れられたことを機縁として教えを聞かせていただくことができた。こういう仏教が浄土真宗。これが、穢土の住人である我々凡夫が浄土を願うことができるようにさせて頂く。それは他ではないのだ。これは念仏往生という。南無阿弥陀仏はたらという言葉の用きで、この娑婆に身体を置きながら、この穢土の不純粹な世界に身を置きながら浄土を願うことができる。仏法を聞いたからといって、後書に書いて頂いてあるように、この世の世俗的欲求が満たされることは考えられないが、問題は私の置かれている現実の中に、本当に明るく、本当に満たされた精神生活ができるようになる場所が、場所といえますか世界といえますか、それが阿弥陀如来の本願によって開かれた浄土という精神世界である。それがはつきりすることが一番大事です。我々一人一人がはつきりさせていただくには、南無阿弥陀仏はたらの用きに依らなければできないことなのです。我々がいくら自力でそうなるうとしてもできない。一般の宗教とはそこが違ふのです。皆さん選挙のことに関心があつたと思いますが、私はこのほど衆議院の選挙で選挙広報がきました。あの選挙広報をずっと読んでみましたが、宗教ということを書いてあるのは一人も当選しなかつた幸福実現党だけでした。私はずっと読んでみまして、宗教ということを書いてある政党があるかといったら、幸福実現党以外は全然宗教ということを書いていない。この国民の為に、多くの人の為に、身命を捧

げて努力します、というのは一般の政治家のご意見であります。ですから、政治家が目指すところ、教団が目指すところが、そこが違うということをはっきりしておかないといけない。それは、我々が物質的にどれだけ恵まれた生活ができるようになって、煩惱がある限りは、様々な不満が出てくるし、怒りも出てくるし、なげきも出てくる。それがこの世というものです。

ちよつと話をかえますが、昨日、私は新宿の北川さんの聞法会がありました。その席で古新聞を一抱え貰いました。その中に二十三日の金曜日の東京新聞に秋の園遊会のことが出ていました。園遊会といいますが、天皇后両陛下が多くの有名人と会ってくださるあの園遊会。私はそういうところに入れないから、記事だけで読ませていただいたのですが、そこで宇宙飛行士の若田光一さん四十六歳、この辺（別所町）の人でしょう。若田光一さんはかつて皇后様が詠まれた歌で宇宙を「真闇」と表現されていたことに触れた。「真闇」とは、真実の「真」に、黒闇の「闇」です。私は知らなかったのですね、新聞を読むまでは。これは、皇后美智子様の歌の中に、かつて宇宙のことを真闇と表現されたことがある。それを若田さんが覚えておられて、陛下に真闇の宇宙は夢と希望が詰まっている感じがしました、と語っていた。東京新聞です。真闇、宇宙を真闇と表現されたのはどういうわけかなあ、と思って私は昨夜一晩考えた。真つ暗という意味ではない。宇宙飛行士は地球の周りを回っているのですから、明るい時もあるし暗い時もある。それなのに皇后様は真闇といわれたのはいったいどういうわけであるか、ということをおは広辞苑を

ひいてみた。真闇と云う言葉は出てこなかった。「真」というところをひいたら、「本当の」とか「真実の」とかいう意味なのだとあります。真闇といわれたのは、真っ暗というようにいわゆるこの目で見た暗さを用いようのではなくて、何が起こってくるか分からないところ、という意味で使われたのではないかと思う。宇宙飛行士は、行くときは元気で行ったのだが、帰りに故障が起こって宇宙船が焼けて亡くなったことがあります。ですから、何が起こるか分からないようなところであり、人間の知恵の及ばない、ほんの少しばかり宇宙船が飛ぶということで、ほんのわずかばかりが分かってきたけれど、殆ど大部分が分からないので、何が起こってくるか分からない世界、という意味で真闇と宇宙のことを云われたのではないかと私は昨夜考えました。これは間違っておるかもしれませんが。皆さん、間違っていたらおっしゃってください。それで、真闇とは宇宙だけのことではなくて、この世全てが真闇です。先に何が起こってくるか分からない。政治家の中川昭一さんが寝ているままで亡くなられた。あの人はアルコールをよけいおあがりになる人だった。アルコールのせいでも、どうも身体の調子が本当でない、とそういうことも聞いておりますが、とにかく、若い方で将来期待された政治家がああ若さでお亡くなりになった。ということでございますが、そういうことが突如として起こってくる。「きょうともしらずあすともしらず おくれさきだつ人は もとのしづくすえの露よりもしげしといへり」と白骨の御文（八四二―L三）にでていいます。だけれども、普通一般には年長者は先に死ぬのだと決めておるので

す。そういうことがこの世の中の習いでございます。私はいつ命がどこで終わるかもしれないけれども、そういうことを問題にしていたら、本当の仕事はできないのだ、というところに立たせていただいています。それは仏法のお蔭様だと思っております。

それで話を元に戻します。『一念多念文意』五四五頁の十六行目です。『一念多念文意』とは、関東の御門弟の中で、お念仏をたくさん称えたらたすかるのだという一派と、一声でいいという一派とあって、相争っていた。そのことを聞かれた親鸞聖人が、一念多念のとらわれをしてはならないということを顕らかにしてくださったこの書物を『一念多念文意』といい、お西さんでは『一多証文』という。その五四五頁十六行目です。この『聖典』は十六行でできておりますから、十六行目は最後の行です。

「浄土真宗のならないには、念仏往生ともうすなり。まったく、一念往生・多念往生ともうすことなし。これにてしらせたまうべし。南無阿弥陀仏」

と書いてある。念仏を数多く称えたからたすかるのだとか、一遍だとだめなのだ、というような考えも間違いであるし、一遍称えれば間違いなくなるとすかるのだ、余計称える必要もないのだと云って自分の説にこだわっている人も間違いだ。そういうとらわれを超えて、我々は南無阿弥陀

仏という言葉によって、私の迷いが翻る。転悪成徳、悪が転じて徳となる。我々の体質というのは悪です。これは人間の道徳的善悪ということとは違います。仏法で云う悪というのは、仏の教えに背いて我執と煩惱で生きているのです。俺が俺がという心で煩惱生活をしている、それが悪です。それからもう一つは、他の動植物の命をとらなければ一日も命を繋ぐことの出来ない、そういう悪です。また、人間同士が争う。私は昨日ちょっと東京の宿、常盤台のウィークリーマンションでテレビを見たのです。民間放送で自衛隊の護衛艦とかイージス艦とか軍艦の話があった。日本を防衛するための自衛隊だから、海上自衛隊も航空母艦はいらないのだ、と云っていたのです。ところが今テレビで映っていたのは、ヘリコプターが飛べるような甲板のある航空母艦。日本も段々エスカレートして航空母艦、準航空母艦を造るような時代になった。それは北朝鮮とか中国を意識している。平和、平和といいながら一方では、いざという時には戦争だ、という心で生きているのが人間だということを、私は思いました。個人でもそうです。国家だけではありません。そういう罪深き私が南無阿弥陀仏という言葉によってたすかっていく。たすかっていくというのは、この穢土に身を置きながら、この不純粋な世界に身を置きながら、純粹なる如来の御光の世界を生きることができるようになる。これがありがたいです。ありがたいというのは、ご利益があるという他の宗教という病気が治ったとか、金が儲かるようになったとか、ということとは違うのです。ありがたいというのは、あること難い。人間の命の本当の意味がわかった。頷けた。

そして私たちが、いつ命が終わっても間違ひなく成仏できるということをはつきりさせていたたくようになった。これがあるがたいです。それで皆さん、座談会のこととひとつ副住職様にご相談申し上げておる。ありがたい。私は本当におかげでありがたい教えに遇わせていただきたすかりました。本当にお蔭様でした、というお言葉を自由にだされる座談会にしていただけたらどうでしょうかと。昨年のこれ（「真実の宗教」十六）をみると一問一答になつておる。一問一答、それは個人的なお尋ね。それは皆さん聞いておるから参考にはなるけれども、本当に自分はたすかりました、お蔭様でした、という気持ち満ち満ちておる、そういう座談会にしたらどうかと思ひます。司会の方がどうですかと発言をうながす前に、貴方とはちよつと違ひますけれども、この喜びがありますよ、ということ、次々と述べていただけるといふ座談会こそ報恩講の座談会だなあ、と昨夜から考えていた。それで、今日おじゃましたらいつぺんご相談申し上げてみないと思つておつた。私の云うとおりにしてくださいということではないのですが、できたらそうしていただきたいなあと思つてゐるわけです。二時過ぎましたので、しばらく休憩させていただきます。

〈休憩〉

それでは再開いたします。資料一の(四)に、

(四)信心往生の教え (『唯信鈔文意』)

『唯信鈔文意』というのは、聖覚法印の『唯信鈔』の中の難しい言葉を関東の門弟にわかりやすくその心を述べられたものでありまして、親鸞聖人は『唯信鈔』を何遍か書写して関東に送られたと同時に、自らお書きになりました『唯信鈔文意』も何回か書き写して関東に送られたといふことが分かっております。それで、それほど親鸞聖人は聖覚法印の『唯信鈔』を大切にしておられた。これらは私の考えですが、『唯信鈔文意』は『選択集』の要約書といえますか、法然上人の『選択本願念仏集』を易しいかな交じりの言葉でその大要を述べられたものです。題の「唯信」の唯とは、これ一つ、信心一つと云う意味です。

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし、よきひとの仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。」

唯信です。「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし、よきひとの仰せをかぶりて」、ここ

が大事なところです。師匠法然上人の教えを頂いて深く信ずる。その信ということは、人間が自分のその知性や感情で作った信仰ではなくして、如来のお用はたらきによって如来の本願力によって我々の愚身、愚かな身の中に響いた純粹なる仏のお心が我々の信心である。これを他力回向の信と申します。単に他力を信ずる信心ではありません。他力回向の信心。ここのところが大事なところです。法然上人は諸行、念仏以外の行（自力の行）はこちらから回向しなければならぬ。念仏は回向する必要がないと、不回向と云われた。親鸞聖人は、不回向というのは回向がない、ということとは違うのだ。こちらから回向する必要がない、ということなので、回向が如来のほうにあるのだと。如来が我々のほうに用はたらきかけて私たちの妄念妄想を転じてくださる。これを回思向道という、これが回向なのだとは何度か例会の時に申し上げております。回因向果というのが普通の回向です。ところが親鸞聖人の回向は回思向道。回思向道というのは、人間の思いはからいがひるがえって本願の大道に向かうという。我々自分の力でこれはできない。毎日毎日、色々なことを思っているわけですから、煩惱による妄念妄想が心を覆っているわけです。その妄念妄想が、南無阿彌陀仏によってひるがえる用はたらきそのものが回向です。その如来の回向に依らないと、我々は妄念妄想の奴隷になってしまうわけです。朝起きてから寝るまで。寝てからも夢を見ます。皆さん夢を見ませんか。私はこの頃夢をよく見て熟睡が出来ないことが多いのですが、それも小さい時の少年時代の夢とか小学生時代の夢とかを見るのですね。その時の友達の顔が、その時の

顔ででてくる。色も付いています。カラーです。この前も夢を見ましたら、小学校の時、女の子が縄跳びをしている時に歌った歌があります。「ここはどここの細道じゃ 天神様の細道じゃ 御用のないものとうしやせぬ この子の七つのお祝いに お札を納めにまいらいます 行きはよいよい 帰りはこわい こわいながらもとうりゃんせ とうりゃんせ」と、歌いながら女の子が縄跳びをしていた。それを私はそばで見ている、いつかその言葉が頭に入っているのですね。ところが、この子の七つのお祝いにというのがどういう意味かというのを私は調べてみたら、東北地方の天神様の菅原道真を祀っておる社に、その地方の習慣として子どもが生まれた時にどうぞ七つになるまで守ってやってくださいと。昔、乳幼児の死亡率が高かったのでそういう祈祷をして、元気で七つになったら天神様にお札を返納し、ありがとうございますとお札に行くのだ、という意味だそうです。「この子の七つのお祝いに お札を納めにまいらいます。」そのあとの「行きはよいよい 帰りはこわい。」というの、どういう意味かわかりません。私はそういう歌が夢の中にでてくる。夢も妄念妄想なのです。今からこんなことを実現しようたつて出来ないようなことが夢にでてくる。覚めてみるとあれは夢だったなあと。こういうことで夢も色々なことがある。人間の妄念妄想というのはそういうものだと思います。それが翻っていく。これが夢だったと覚める。それで私は今よく流行っておる新興宗教でも使う言葉ですが、「生かされている」という言葉があります。浄土真宗は「覚めて生かされる」もっと詳しく云ったならば、「覚めて浄土を生きることが

できる」人間にさせていただけ。単に生かされているというのではありませんね。生かされているというのは一つの観念でございますから、心臓を私が命令して動かしているわけではないのです。私が肺を動かして呼吸しているわけではないのです。自然に心臓も肺も動いているのだから、私が生きているのではなく、生かされているのだ、という思想があります。それは一つの観念です。間違いというわけではないけれども、そういう生かされているという思想では、我々は生死を超えるということは出来ないのです。もういよいよ最後に近づいたという時に、生かされているといつて喜んで生きていけるかと云ったら、そんなことは考えられないのです。私は、どれだけ健康であろうが不健康であろうが、もうたすからないと云われようが、目覚めて浄土を生きる人間にさせていたたく。これがたすかるといふこと。そういうことです。それは、真つ暗になつてしまふはずの人間が、目覚めて浄土を生きる人間にさせていたたく。信心がはっきりした時に、直ぐに命が終われば「往生即成仏」と云えるでしょうけれども、信心がはっきりした後も身体の命が続いておれば仏というわけにはいかないわけです。いろんな欲も起こるし怒りも起こるし、だけど一息先は成仏できる身であるといふことを、ちゃんと信じ知らせていただけ。そのところが大事なところです。真宗の「往生即成仏」といふのは、信心を得た時に直ちに命が終われば「往生即成仏」です。ところが、信心を得ても身体の命が続いている間は、やはり罪を造つて生きていくのです。それは『歎異抄』を見ますと書いてあります。『歎異抄』の第十五章(六三六

— L十 —) です。

「弥陀みだの願船ねんぶねに乗じて、生死しやうじの苦海くかいをわたり、報土ほうどのきしにつきぬるものならば、煩惱ぼんのうの黒雲くろぐもはやくはれ、法性ほつしょうの覚月かくげつすみやかにあらわれて、尽十方じんじつぱうの無碍むげの光明くわうみやうに一味いまいにして、一切いっけつの衆生じゆうじやうを利益りやくせんときにこそ、さとりにてはそうらえ。この身みをもつてさとりをひらくとそうろうなるひとは、釈尊しやくそんのごとく、種種しゆしゆの応化おうけの身みをも現あじ、三十二相さんじふにさう・八十随形はちじゆいけい好こうをも具足ぐそくして、説法せつぽう利益りやくせうろうにや。これをこそ、今生こんじやうにさとりをひらく本ほんとはもうしそうらえ。『和讚わざん』にいわく「金剛堅固こんごうけんこの信心しん心のさだまるときをまちえてぞ弥陀みだの心光しんこう摂護せつごしてながく生死しやうじをへだてける」(善導讚ぜんだうざん)とはそうらえば、信心しん心のさだまるときに、ひとたび摂取せつしゆしてすてたまわざれば、六道りくどに輪回りんねすべからず。」

このところが大事だいじですね。「信心しん心のさだまるときに、ひとたび摂取せつしゆしてすてたまわざれば」如来にがひのみ光みやうの中なかにおさめとられている。これは身体しんたいを持つている間に、生きている間にちやんと摂取せつしゆの光明くわうみやうの中なかにおさめとられるから六道りくどに輪回りんねすべからず。輪回りんねとは迷まいの世界せかいにぐるぐるとへめぐると云いうことです。これがなくなる。命終めいしゆうわろうとする時に成仏じやうぶつできる身にさせていたただく。

「しかればながく生死をばへだてそうろうぞかし。かくのごとくしるを、さとるとはいいまぎらかすべきや。」

これをさとりだと云う人もあるが、それは「信心成就」ということであつて、肉体がある限りはさとりと云うわけにはいかない。

「あわれにそうろうをや。浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならいそうろうぞ」とこそ、故聖人のおおせにはそうらいしか。」（六三七―一）

『歎異抄』第十五章の結びの言葉です。さとりは開けてないけれど、間違はなくさとりに到達できる身にさせていただいた。こういうことです。信心を得たという深い喜びというのはそこで。信心を得た時に直ぐに命が終われば「往生即成仏」です。その時に。ところがやっぱりそのようないく人といかない人がある。私も一九四六年から四七年に大体のところ曾我先生の教えで『歎異抄』第一章の味わいを感じさせて頂くことができて、信心が決定したといえればちよつと袈裟に聞こえるでしょうが、ここにひとつ「回心」という体験があるわけです。それからずっと今日まで教えを聞かせていただいて、長生きさせていだいたけれど、生きている間は色々な迷

い心を起こして物欲にも迷わされ、名誉欲にも迷わされてきているけれども、ちゃんと願生浄土という、浄土を願うということは間違いない。この一点はどんな迷い心が起きても浄土を生き貫いていける、という世界を私はお蔭様でいただきました。「信心相続」ということはそういうことではないかと思えます。信心が若いときから、だんだん年をとっても消えていくのではなくて、それがいよいよ深く続いていくことでしょう。それでさっきのことにかえりますと、「眞実信心をうれば実報土に生まると教えたまえるを、浄土眞宗の正意とすべしとなり。」眞実の浄土に生まれさせていただく。眞実の浄土とは「光明の精神界」。私ははつきりと申しますと、浄土はいかにも実体的な世界があるように思いますが、またそのように説かれている所もあります。が、それは方便であつて、「光明の精神界」、どんな闇が自分に襲つてきても念仏申す時にその闇が開けていく、光明の世界が、私の上に現れてくださる。「光明遍照 十方世界 念仏衆生 撰取不捨」ということが『観無量寿経』にあります。そこが非常に大事だということを親鸞聖人が云われる。その光明を感知するところのこの用はたらきというものも如来から賜っている。「眞実信心をうれば実報土に生まるとおしえたまえるを浄土眞宗の正意とすべし。」このことが長い間はつきりしなかつたのです。死んだら極楽だというような平凡な理解で眞宗が語られてきた。また、「死んだら極楽」と徳川幕府がそのように教えよと指示していたようです。社寺奉行というものがあつて、生きている間は殿様の云うとおりに従い年貢を納めよ。死んだら極楽である。

というようなことを政策として徳川幕府が用いた。社寺奉行というのは、お寺とか神社を取り締まる役所であつて、それがお寺にそういう指令を出したので明治までずっとそれが続いてきた。ところがそれではたすからないのだとはつきりしてくださったのが、清沢満之先生です。清沢満之先生が出られたということは大変なことなのです。それで清沢満之先生の教えを聞かれた曾我先生・金子先生・暁鳥先生などという方々が、清沢先生の教えをもとにして親鸞聖人の教えを広めてくださった。それが「信心往生」ということです。それで私解として、ここに書いてあります。私解とは私の領解です。

信心往生は単なる死後往生思想に対す。

対すとは単に死んだら極楽だというような、一般的な平凡な宗教ではありません。他力の信心が成就した時に往生が定まる。我々が今まで知っていなかった光明の世界を生きるようになって。ありがたい。先ほど真闇ということを申しました。この世は仏法がなければ真闇です。何が起こってくるかわからないです。それで、時間がだいぶ切迫してきましたが、もう一つだけ申し上げますが、関東地方の大きな問題です。

八ッ場ダム。八ッ場とかいて、ヤンバと読む。このダムは五十七年も長い間かかって、設備の

一部が出来ているにもかかわらず、今回これについては予算をつけないと国土交通大臣が明言したら、それに対して一都五県の知事が大反対。これだけ苦勞して、人を説得して立ち退かせてダムを造りつつあるというのに、いまさらそれを止めるのかといつて大変な問題になっているでしょう。これは、九州のほうでは、川辺ダムの問題とよく似ておりますが、それよりもっと酷いのです、激しいです。これは一都五県の知事が総反対です。今の国土交通省の方針では予算をつけない。私は、こういうことが穢土の穢土たるゆえんだと思う。そこを立ち退かなくてはならなかった人は残念だと思うでしょう。先祖の墓まで移して、自分の土地やら建物も全部移して、ダムが造られて来たのに、それが全く無駄事になってしまったと思うと、涙が流れる。酷い体験をせざるをえなかったのに、今更ダム工事を止めるとは何事だといって腹を立てるのも無理からぬことだと、私は思います。ところが、そういうことが現実にあるのがこの世の中です。どう云ったらいいか、政治的にいくら解決をしようとしても解決できないという問題、そういう問題が次々と起こってくる。政権がかわったら益々そういうことが起こってくる。都合の良いこともあるが、都合の悪いこともたくさんでてくる。千葉県が酷い目にあっている成田と羽田のハブ空港の関係。千葉県の知事も腹を立てているけれど、一応納得してしまった。あれはまあ、一応納得したという話です。そういうことが始終起こってくるこの穢土の中で、浄土を願う精神生活が出来るということが、これがなかったならば我々は明るく生きられないんだなということを、私は最近

思わせていただいております。時間がまいりました。資料の(四)までしか話せませんでした。また命がありましたら、この後はまた次の機会にお話申し上げることにいたしまして、今日はこの辺で終わらせていただきます。

〈座談〉

(司会)

先ほど櫟先生からご要望がありましたので、一問一答形式でなく、私はこのように頂いておられます、喜んでおります。また、逆にこういうところがなかなか頂けないとか、そういうことでお話いただければ。また、他の皆様が私はこう思うよというなかに、本当に座談というと皆さんで信心を語り合うといえますか、そういう形が取れば理想でございますが、どうしてもここは先生に尋ねたいということがありましたらおっしゃってください。時間もあまりございませんので、どうぞ、いかがでしょうか。

(先生)

私はお蔭様で本当に親鸞聖人のおかげで開けましたという、本当に明るく生きておりますという喜びを語りたい人が、いっぱいいらっしゃるのではないですか。遠慮しておっしゃらない方があることが、お顔を拝見していたらわかります。私にも発言させていただけたいなあ、というお顔の方が何人かいらっしゃる。そういうことで先ほどご要望申し上げたわけです。

(岡田)

住職さんに岡田さんと云われ、呼び水になるかどうかわかりませんが、今日は報恩講、また親鸞聖人さんのご恩に対する報謝といえますか、私たちが本当に心から喜ばしていただいている。その感謝の気持ちはお蔭だと思ふのですね。私がお蔭様で親鸞聖人さん

の教えを先生のような善き人からまた聞かせていただきまして、この如来様の本願力の用きはたらですね、この愚かな私に響いてまいりまして、ほんとうにこの浄土真宗の真の宗とむね先生がいつもおしゃってくださいます、この真を味わうことをいただきまして、無明の私が光明を日々感じさせていただいておりますことに本当に感謝しております。本当にありがたいことです。

(先生)

私も貴方と同じように、師匠のおかげで生きる道をちゃんとはっきりさせていただきました。私は大体子どもの頃から電気のが好きで、小さな鉱石ラジオとか一球（真空管一本の簡単な）ラジオとかに関心を持って組立てていた。ところが、戦争が終わって世の中が混乱して大変動が起こった時に、どう生きて良いかわからなくなって、藤代先生のおかげで曾我先生のお話を聞かせていただき、その頃は、浄土ということがはっきりしませんでした、漠然とでしたけれど念仏往生ということが人生を手段化しないことだと。生きとることそのものが尊いのだと、目覚めて生きていくことそのものが尊いのだという世界をわからせていただきました。ありがたいことです。貴方と同感です。

(岡田)

本当にありがたいと日々を暮らしておりますことに感謝しております。

(先生)

どうぞ他の方もこういう喜びを語ってください。

(司会) どなたか。目が合うとお話されたいというご様子ですが。

(佐々木みつ) すみません、ひとこと。なかなか家族のものに説明が出来ないので、ちょっとお尋ねをいたします。今日、大変良いお話を、私の疑問に感じている、それとも説明に迷っているとお申し込みでしょうか、そういうことが今日でましたので、お尋ねいたします。家族のものが私の身の回りにたくさんといえますか、この高齢化社会になりましたので、私の親戚に九十一歳、一〇一歳とあるのですね。そうしたら、実家のほうでまもなくであると思うので支度をしておいてくれと。危篤状態だときっと思うのですが、何回も رفتり来たり出来ませんので、私はそのときが来たら教えてくれと約束していたのですが、家族のものが、ねえ、そんなに年をとってるのに明日とも知らない、きつとね、さとりを開いていないのだということです。さとりととはそういうものではないのだよというものの、若い人との会話は私にとって難しいのでね。だから、私は浄土ということも櫟先生から聞いていますので、生きていくうちにこの浄土真宗に遇いましたことは、私は大変うれしゅうございました、また櫟先生のお話をこんなに細かく説明してくださっているにもかかわらず、人に対してそのさとりということについて、明日もわからない人のことをどうやって伝えればいいのかということをお尋ね申します。

(先生) それは難しい問題ですね。貴方にそうおっしゃる方が、どういいうご心境かということも

直接伺ってみないことにはわかりませんが、貴方のお話だけでここでどうしてという方法を申し上げるわけにはいきません。私はこういうことでおかげで教えに遇いました。貴方もどうか遇ってくださいというよりかかないでしょうね。それで、八ツ場ダムのことを申し上げましたが、どれだけ難儀してもひっくり返されることがあります。世の中のこととは。もうこれよりほかないという決心をして先祖伝来の土地を離れ、金も使い、墓も移した人たちの切実な思いを聞いて、世の中こういうところだと。こういうところだからこそ、阿弥陀如来の本願があつて、どうか一つ自分の置かれているところに目覚めて生かしていただける智慧を授かりなさいと釈尊はじめ親鸞聖人など多くの方が教えてくださいださるのだと。そのおかげで、私のような愚か者もこうしてこの年まで生かしていただいております。貴方も御自分の心境を切実にお伝えいただいたらどうかと思います。

（佐々木みつ） わかりました。努力してみます。ありがとうございます。

（先生） ご自分にありがたいという気持ちがあれば、どのような表現でも伝えられると思います。今日はその一つの例として、美智子皇后様の真闇という言葉を拾わせていただきました。ほかにお喜びの方がおられましたら、どうぞおっしゃってください。

（小島哲） いつもお世話になっております。私はインターネットで光照寺様を知りまして、「やすらぎ」という寺報を読みました。思い切ってこちらを訪ねまして、櫟先生にお会いでき

まして、それがご縁で真宗会館でも櫟先生のお話を聞かせていただきました。それがずっと続いて今日に至っております。このように素晴らしいお寺さんで素晴らしい皆さんにお会いできていることが本当にありがたいし、言葉に表現できない喜びですね。これが一言かなあと思っております。これからも宜しくお願いいたします。皆さん宜しく願います。

(先生)

ちよつと貴方のお話を頂きました、私が感じましたことは、親鸞聖人は弟子一人ももたず、ということ『歎異抄』の中で私はありがたい言葉だと思っております。それは、自分は師匠の立場に立たないということです。いつまでも教えを聞かせて頂く聞法者の立場で、皆さんと一緒に喜びを共にさせていただくことをおっしゃっておられる。自分の師匠は法然上人だと。私は弟子一人も持たずと云われる。だけど、親鸞聖人は弟子がたくさんおられるのですけれども、親鸞聖人ご自身は自分が師匠だと思っていられない。御同朋御同行として、いつも自分の聞法の友達として手をつないで教えを聞いていくという喜びです。そういうお喜びを貴方がおっしゃっていただいたと思います。

(小島哲) その通りです。ありがとうございます。

(司会) 他にどなたかいらっしゃいますか。

(松橋)

こんにちは。私は子どもの時、結婚するまで北海道に住んでいました。私は、サラリーマンの家庭に生まれまして、お内仏というものがなかったのです。こちらで早くに主人を亡くし、光照寺様とご縁がありまして、その時からお付き合いさせていただいております。私や子どもはとっても悲しい思いをしてお内仏を持ちましたが、私に孫が出来ております。四人の孫がうちに来ると一番先に何をするかというと、爺ちゃんにチンチンをしてくる、といってお内仏に向ってくれます。今のお話、勉強させていただいたお話とはちよつと違うかもしれませんけれども、孫にとってお内仏がそこにあるということ。はこれからの時代を生きていくのにすごくいいなど。うちに来て遊んでも爺ちゃんにチンチンしてない、そういつて二歳、四歳の子どもがお内仏に行ってくれることが私何よりも幸せだと思っております。ちよつと話が変わってしまいましたが。

(先生)

それはありがたいことです。

(松橋)

手を合わせてくれる孫たちが今後、私が亡くなっても手を合わせてくれるかなと思える
と、とってもうれしいです。

(先生)

私が曾我先生から教えていただいたのは、幼児の宗教教育というのが大事です。それは
礼拝の習慣をつけることです、と云われました。それだと思えますね。私は北海道に一
回だけ行きました。今の常盤台の常盤銀座というところに北海道の人がきて飲み屋をし

ておられる。その看板が「おぼんです」とかかっています。「こんばんは」というのを北海道の人は「おぼんです」というそうです。言葉も違いますが、我々大谷派にとつては、北海道は明治維新に政府の政策に協力して北海道に移住をして、しかもそこに大谷派のお寺がたくさん出来ました。住職が決まらない先に門徒の方がお寺を建てたお寺がたくさんあるそうです。そういう北海道は真宗大谷派にとつては大変な世界だと思わせていただいております。今日でもずっと毎月布教者が回っていかれるような月例巡回があるということを知っています。信心がはつきりすることが本当にありがたいことだという気持ちをも、私は北海道からおいになつた方からよく聞かせていただいております。そこが内地とは違うのだと。鹿児島はどうかと申しますと、鹿児島は昔は真宗禁制のところでした。明治以後開教師の方々のご努力によって今日浄土真宗のお寺が相当多くあります。隠れ念仏という歴史が鹿児島にありまして、禁制の中で隠れてお念仏をしていたという歴史がありまして、北海道はそういうことはないと思ひますけれど、やはり日本の北と南でそういう味わいを共有させていただけれると思っております。

(司会)

時間がまいりました。話したいなという方もおられたと思ひますが、櫟先生には毎月定例で御法話を頂いておりますので、是非毎月の法座にお越しただければありがたいと思ひます。

(住職) 副住職がありがたいと思っっていることを述べなさい。

(副住職) こうしてここにいらっしゃるということがありがたいことだと思っ、こうして皆様をご参詣して下さっていることがお陰さんという背景の中で、いまこうしてご参詣していただいていると思いますし、納得させていただく。なるほどと思うのが信心というなかで、なるほどということばかり思わせていただいております。そこに如来回向を喜ばせていただいているかどうか、そういう問いかけを大事に頂いて、聞法精進の歩みをさせて頂くということがありがたいということではないかと思ひます。

(住職) ありがとうございます。先程、櫟先生のご紹介を、色々申し上げさせて頂きました。が、そういう話はカットしまして、私はこの浄土真宗に、人生において出遇わせていただいたことが、本当にありがたいことだと思っ、おひます。弁円の言葉をただけ、
「有漏の穢身はかわらねど、変わりはてたる我が身かな」。というような心境であります。先ほど先生は、曾我先生の言葉をもちひ、その信仰の生活を、「願生浄土」、というお話をしてくださいましたが、私は、「夢」、というお話が先程先生よりありましたが、『東方偈』で、「夢・幻・響のごとしと覚了すれども」、その前の言葉に合体しまして、『厳浄の土を志求する」、これが私における、「願生浄土」としての歩みを、今後死ぬまで、死しても、歩ませてもらいたきたいと思っ、おひます。ありがとうございます。

(先生) ちよつとその場所を。

(住職) 『東方偈』です。

(先生) 何頁ですか。見ておっしゃってください。

(住職) 四八頁です。「嚴淨ごんじょうの土を志求しぐし、受決じゅけつして当まに作仏さぶつすべし。一切の法は、猶なおし夢む・

幻げん・響こうのごとしと覺了かくりようすれども」、「嚴淨ごんじょうの土を志求しぐし、」が「願生淨土がんじやうじゆ」であり、

「夢む・幻げん・響こうのごとしと覺了かくりようすれども」、目覺めて生きるということが先ほど先生からあ

りました。しかし、全てを見ることは、如来を全部見るとかですね、淨土を全部見る

とか、ですね、自分が仏となるとか、一切の法性法身を、全部いうことは出来ません。

この娑婆しやばの中なかにおいて、「夢む・幻げん・響こうのごとしと覺了かくりようすれども」、と頂いて、その一分の

喜びは、殺されても、死んでも、失われないものではないかと思つて、「現生正定聚不

退 当来滅度」と頂いて、そんなような表現を、『東方偈』に感じております。

(先生) そうですか。ありがとうございました。

(住職) 先生、ありがとうございます。

(先生) 今のところは『大經』「下卷」の四八頁の中ほど(L—一〇)にございまして、先ほど

夢の話をしました。それとも関係があると思います。それでは時間がまいりましたの

で、これくらいで終わらせていただけたらと思います。

(司会) ありがとうございました。

あとがき

本書は平成二十一年十月二十五日、第十九回報恩講における櫟暁先生のご法話の記録です。

二〇一一（平成二十三）年は法然上人が八百回忌のご法要を迎え、宗祖親鸞聖人は七百五十回忌の御遠忌を迎えます。本書で先生は「浄土真宗は法然上人と親鸞聖人のお二人が共同して開いていただいた大乘仏教の究極の教え。究極とは、一番大事であり、一番わかりにくい、しかし多くの人に広まっていく、そういう教え。」とお話されています。

「ただ念仏」に帰着する教えが、難しいとか、分かりにくいという声をよく耳にします。私自身もそう思うことが多々あります。しかし、心の奥底では善悪を超えた無分別の世界、絶対自由・平等の世界を求めているのが私達であって、知的関心に留まらず、心の深層の欲求が仏の本願を聞き開きたいと願っているのだと思います。その確信が「多くの人に広まっていく教え」だと云えるのではないかと思えます。

作家の五木寛之氏の「親鸞」が書店に並び、たちまちにベストセラーになり、親鸞旋風が巻き起こっている感を覚えます。ある人は「五木さんの世界に引き込まれ、親鸞という人が身近に感じられ、人間の抱え持つ苦悩というものに正直に向き合った人だとよく分かった」ということを

話されてきました。

現代は布教活動が難しいという指摘もありますが、混迷を深める世の中であり、苦悩しつづける私達が求めてやまない、お念仏の教えを発信していければ有難いです。今年は報恩講二十回目という節目であり、同時に光照寺は二十周年を迎える歴史的一頁を刻みます。節目の法要をご縁の皆様と共に厳かに勤め、御遠忌に向かつてお念仏の教えを一層味わう機縁にしていきたいと思えます。

先生には毎月当寺の会座でのご教化、並びに報恩講のご出講に深謝致します。また、ご多忙の中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様、校正を手伝ってくれた伊東良英氏に感謝申し上げます。合掌

平成二十二年十月三十一日

第二十回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎